

文学が定義する「沖縄」

—文学賞からみる復帰後の物語—

張 夢 霄

はじめに

1970年代の沖縄において、琉球新報社と沖縄タイムス社が琉球新報短編小説賞（1973～）と新沖縄文学賞（1975～）を設立した。沖縄は第二次世界大戦で沖縄戦の戦場となり、戦後から1972年までの27年間には琉球列島米軍政府、琉球列島米国民政府（USCAR）の統治下に置かれていた。60年代末頃から日本復帰運動が盛んになり、1972年に沖縄の行政が正式的に日本に移行された。そこで、1970年代の日本復帰直後の沖縄で、大衆に向けて宣伝の力を持つ2つの新聞社が文学賞を主催した。

従来の沖縄文学研究は、沖縄文学と政治の関係に注目している。沖縄文学¹とは一般的に、明治政府の廃藩置県²以来の沖縄県で標準語に書かれた作品を指し、それ以前に琉球語を用いた作品は琉球文学だと考えられている。戦後米軍政府の統治期間の1953年に、『琉大文学』が創刊された。それに関して、岡本恵徳は『琉大文学』を1950年代初期の米軍反共政策に対する反発だと考え、鹿野直直は『琉大文学』と琉大生の行動を米軍政府への反抗の文学として取り上げた。戦後の沖縄文学が米軍政府に制限される場合が多いのに対し、1972年日本復帰後の沖縄文学がその直接的な規制から解放され新しい政治環境に置かれている。そこで、岡本恵徳は戦後から1972年までの文学を「占領下の文学」、その後の文学を「施政権返還後の文学」を呼び分けている。

このように、これまで岡本恵徳、新城郁夫、新川明などの沖縄文学研究者は、『琉大文学』をはじめ、戦後沖縄文学を社会問題の解決方法の1つとして考察し、政治事件で文学を時期区分してきたが、本稿では大衆に影響力を持つ新聞社が設立した文学賞の制度に注目する。文学賞を中心に、選考に当たって選考部門がつけられ、応募から選考、発表までのプロセスに関わる沖縄の作者、読者が集まってきた。政治と密接する傾向が復帰前後で沖縄文学における一貫性を持つことであり、検討する両賞の受賞作品にもみられるが、両賞の選考委員大城立裕はこれま

での沖縄文学研究者と異なる角度から、つまり、沖縄文学に含まれた複雑さを政治に帰結させるのではなく、文学賞での実践から考察する。琉球新報と沖縄タイムス社の雑誌『新沖縄文学』³が文学賞の名の下に作品を募集し、受賞作と選評を発表する場所になった。各賞とも応募者が沖縄出身者と在住者に限定されており、沖縄の地域性を重視する文学賞である。

文学賞の設立から数年の間、受賞作が決定されない年、さらに受賞作がない年が出ている⁴。またこうした中で受賞をめぐり、選考委員は「ふくらみ」、面白さについて議論してきた。

これらの議論は応募作品の文学性に関する指摘にすぎないと思われるかもしれないが、戦後沖縄文学研究の背景に遡ると、それだけではない。両賞の設立から2008年まで、唯一に30年以上選考委員を務めていた大城立裕は、沖縄の社会問題に関心を寄せた作家で沖縄初の芥川賞作家である⁵。大城立裕が考えた沖縄問題を描く1つの姿勢は鹿野政直がこう述べた。

大城が、強権支配とそれへの抵抗を、政治問題としてのみでなく、あるいは、政治の問題としてよりはむしろ、文化の問題としていることを意味する⁶。

つまり、米軍占領をはじめとする戦後沖縄における社会問題は、強権支配という政治問題として考えられるほか、文化の問題でもある。こうした考えをもつ大城は文学賞の選考で指摘した応募作品の「ふくらみ」の問題は、文学性にとどまらない。その背景には、沖縄の問題を政治支配と被支配の枠組みを超えた考え方を文学で表現する営みである。

この初期の選考過程においては、「沖縄文学」に意味を付与し定義する作業が、文学賞の選考制度により生じていることが浮かび上がる一方、逆にその意味や定義を緩やかに、ゆたかにする動きもみられる。

したがって、本稿は作品分析を方法の1つに据え、文学賞の制度に基づき、文学賞の受賞作と選評を通して日本復帰後の沖縄文学を考察する。特に70年代から80年代初の作品に注意を払う。『骨』⁷は沖縄戦の記憶を読者に呼び起させる小説であり、戦争遺骨の問題、復帰後の沖縄振興にもたらす一連の問題が小説から直接読み取れる。『骨』と異なる手法で沖縄を描く物語『ロスからの愛の手紙』⁸、『お墓の喫茶店』⁹と『嘉間良心中』¹⁰を選択し、『骨』と比較しながら分析する。内容と手法に変化が起きた作品と、明確に転向がみられる受賞作品を選び、受賞作品の題材と手法に起きた変化を考察し、選評で現れた「ふくらみ」の内実を具体的に考える。結果を先に述べると、受賞作品は文学賞の制度の下選ばれ、読まれている同時に、沖縄文学として読むほか、読者のそれぞれの想像力を働かせて

自由に読める特徴がそこから読み取れる。こうした沖縄文学の定義が定められていないのみならず、それをめぐる議論が文学賞を通して展開されている。本稿は文学賞の制度の下で沖縄文学の定義の形成と変化を明らかにしようとする。

I. 文学賞と選考

1. 文学賞について

琉球新報短編小説賞は、1973年に琉球新報社創刊80周年を記念して創設され、年に1回公募している。選考経過、選評と受賞作品は琉球新報の紙上で発表されている。

新沖縄文学賞の場合は、1975年に沖縄タイムス社が主催し、年に1回公募している。最初は『新沖縄文学』に、1975年から1992年までは雑誌『新沖縄文学』に、1993年から2008年までは雑誌『沖縄文芸年鑑』に選考経過、選評と受賞作品を掲載されていた。その後には沖縄タイムスの紙面上で発表している。募集要項に「新沖縄文学賞は、特異の文化的個性を持つ沖縄の地域社会から本格的小説とその新しい書き手が誕生することを待望して創設されたものです。清新な内容と作風の意欲的な作品が数多く寄せられることを期待します」¹¹と書かれている。

選考資格について、琉球新報短編小説賞は沖縄在住者、出身者が応募できる。新沖縄文学賞は「沖縄県在住者、または沖縄県出身者で本土および外国に在住する者」が応募対象となっている。

各文学賞には奨励金の制度がある。琉球新報短編小説賞に受賞すると10万円と記念品がもらえる（佳作は2万円）。新沖縄文学賞の場合は受賞作10万円、佳作3万円となっている。

2. 「受賞該当なし」

新沖縄文学賞では「受賞該当なし」となった年が琉球新報短編小説賞より比較的が多い。ただ、設立から現在までの受賞状況をみると、受賞作品が選ばれない場合が少なくなってくる傾向がみられる。1975年の第1回選考を含め、70年代における5回の選考では、1回（1976年の第2回）のみ受賞作品がある。80年代に入ると受賞作が選ばれた年が増えた。10回の選考中3回は受賞作が選ばれないが、1984年の第10回と1986年の第12回では2作品が入賞された。2001年以降は毎回入賞作が出ている。

選考経過として、最初に、『新沖縄文学』編集部と編集委員会が予備選考を行う。次に、選考を通った作品が候補作となり、選考委員に推薦される。選考委員がそれぞれ3作品を選び、順位をつける。たとえ受賞作品がない第1回の選考過程で

は、応募作品23篇にまず予備選考をする。予備選考を通った6作を選考委員に届く。選考委員がそれぞれ3作を選び、順位をつける。ただ、選考会では、1位になる作品が選考委員ごとに違うので、受賞作品が決められない。島尾敏雄が又吉栄喜の『海が蒼く』を、大城立裕が宮里尚安の『常臥の館』を、牧港篤三が横山史朗の『伝説』を1位にしたことで、票が完全に割れた。その結果、「2¹²時間余の討論の結果、『受賞作なし』とし、2編を『佳作』¹³にした」¹⁴。

選評には選考委員の3人が順位付けの難しさを言及した。島尾は候補作6編が「読みごたえはあった」作品であるが、「欠点もまたそれぞれがかなり深く抱え持っていた」。そのため、「他の委員が強く推す作品があれば、それに反対しても代わりに呈出するだけの強さを持った作品があったのではなかった」¹⁵。島尾にとっては候補作の6編のなかに、入賞させる理由を明確に説明できる明らかな強みを持った作品はない。また、大城は「選考委員の票が割れすぎたということは、いずれもドングリの背くらべだということにほかならない」と述べ、牧港は「各作品が、それぞれ持ち味を異にしながら、力量の点で優劣を決めにくいということであった」¹⁶と述べた。第3回の選考についても島尾は「それぞれに評価が分かれ、どうしても推薦したいという作品は各選考員共々無かった」¹⁷と述べた。

5年ぶりの1982年第8回では受賞作が選ばれたが、島尾は「支持が各作品に散るといふ困難な結果に立ち至った」ことは「今年だけのことでなく、例年の慣わしのようなものではあるが、今年は一層それが強くあらわれた」¹⁸と述べ、牧港は「難産といえれば難産である」、「類型から脱出するのにいま一步というところで低迷している。しかし、とにかく、この作品が候補作の中では一番良かったので推した」¹⁹と述べた。大城は受賞基準に満たしていないのにも関わらず、とにかく一番良い作品を受賞させようと「佳作候補が三作あげられたところで、一作か二作かを落とすよりも、一作を受賞作として押し上げようということになれば、『母たち女たち』を推すことに議論をはさむことができなかった。」²⁰と述べた。また、第8回の選考にも優秀な作品が出たが、応募作品にそれほど大きな差はないと選考委員が考えている。

琉球新報短編小説賞の場合は、設立から現在まで受賞作がない年は1974年度（第2回）、1975年度（第3回）、1985年度（第13回）、2015年度（第43回）の4回である。新沖縄文学賞に比べると数が少ない。総計から見れば、受賞作なしの回数は現在までの48回中4回であり、新沖縄文学賞の44回中の11回より7回少ない。だが、選考経過からみると、候補作品に順位をつけることは新沖縄文学賞と同じく困難であった。

選考はまず新聞社の文化部を中心に第1次選考を行う。選考委員たちが選考委員会で討論の形で候補作品から受賞作を決める。しかし、選評からみれば、新沖

縄文学賞と同じに、受賞作品が決められない場合がある。たとえ1973年第1回の文学賞には、「入選作1編の選定では意見が分かれた」²¹。選考委員の安岡章太郎が「どの作品にも不満があり、また選外になった作品をふくめて、どれにも或る関心を持ったといへる」²²と述べた。

琉球新報短編小説賞の選考過程は新沖縄文学賞と異なり、最初に受賞作品を出さずに、選考委員の合意で受賞作品を決める。新沖縄文学賞の場合は選考委員それぞれ3つの作品を選び、選ばれた作品が完全に割れると3人で討論するという選考の形式においては、受賞作品を出すのがより難しい。そのため、新沖縄文学賞の設立から数年間に、候補作からきわめて素敵な1作を選ぶにくいことが選考に生じていた。琉球新報短編小説賞のほうは受賞作品がある年が多いが、両賞とも、候補作品の順位付けに困難がある。つまり、選考委員それぞれが沖縄文学に優秀な作品への判断基準が異なり、あるいは、基準がまだ定まっていなかったことが考えられる。

3. 「面白くない」、「ふくらみが足りない」

「ふくらみが足りない」という評価が最初に出されたのは、1973年の第1回短編小説賞の受賞作『骨』についての大城立裕の選評である。

「骨」は考えた作品である。考えたとは、図式的に構成がしっかりしたということであるが、そこからくる欠陥もあるわけで、それは感覚的にふくらみが足りない²³。

また、大城が1975年の第1回新沖縄文学賞にも再びふくらみの問題を提起した。それは応募作品全体的な問題としてあげられている。彼が一番に押した作品²⁴に、「いずれも調べた素材だということである。『怨霊島』は大東島の歴史と社会、『常臥の館』は身体障碍児の問題、『内部に居る人……』は精神病院」²⁵という「調べた素材」に注意を払った。

「調べた小説を書く場合のおとし穴は、調べた資料をできるだけ多く書きこみたがることである」(中略)「リアルに生活をあつかった小説で、それなりに人生を感じさせ、よく書けたところを認めるが、ふくらみがたりない。」²⁶

牧港篤三は候補作品の「6篇とも、しまいには太平洋戦争とかかわる」²⁷と述べ、島尾敏雄は受賞作のみならず、「描き方が問題の取入れを慾張りすぎていて、書

きこみが煩瑣である]、「文章が解説に傾きすぎていてよくない」²⁸点を候補作品全体的な傾向として述べた。第1回の新沖縄文学賞では、選考委員が調べた資料と小説の関係を批判的に述べた。題材の同質性と資料の積み重ねで文学の「ふくらみ」がたりなくなることが選評で指摘された。また、新沖縄文学賞第2回の受賞作『蘇鉄の村』について島尾は「文学が要求する豊かなふくらみのようなものに欠ける恨みを感じられた」²⁹と述べた。

1977年度から5年間に受賞作品なしのを経て、1982年の第8回には仲村渠の『母たち女たち』が入賞した。だが、受賞作が出たにもかかわらず、ふくらみに関する批判が続けられていた。

沖縄出身者としての大城は小説『母たち女たち』の素朴さを感じ、沖縄に生活している人々にとって常識的な出来事を物語にするのに疑問を持っている。「逆に素直すぎて魅力がない。それは、発見がないということとも通じる。このようなテーマと筋立ては、沖縄に生きている者としては、きわめて常識的に着想されるものであって、今更これを出されても、『ああ。そうですね』と応じるほかに、なんら興味の発展を望みがたい。題名の個性のなさにも、それはあらわれていよう。ただ一通りのまとまりに成功したことは否めない。この作者には、素朴さを脱けきってほしい」³⁰と語った。沖縄の現実問題を物語にするには、記録ではなく描写の仕方が求められるとしたのである。

島尾は「私がしかもなお先の3作³¹を選び取った根拠は、作品の中に描かれた事実を越えて私のイメージを刺戟してくる付加的な或る微妙なふくらみを感じられたことであつた」と、直接的に文学のふくらみがあることを選考基準に入れた。選考委員は事実を記録し、描くのと異なり、小説という形式に工夫して物語を形成する作業に焦点をしぼり、応募作品に期待している。

さらに、大城立裕は新沖縄文学賞の第3回で小説のおもしろさに目を向ける。

やはり小説として面白くないのが気になる。面白くないのに最後まで読ませるといふのは、これまた選考委員を困らせるのである。5作品のうちでいちばん、さらに前回どれにくらべても文章がしっかりしていて危なげがない、という評価を前提にした上で、やはり私がこれをこんど入選にしたいつもりで選考会に臨んだのは、このままいつまでも面白くない小説を書いても仕方がないのではないかと、とひそかに憂えたからである。波瀾万丈の筋や器用なユーモアを望むのではない。人物の陰影や描写の遊びでよいのである³²。

大城は述べた「人物の陰影や描写の遊び」が小説にうまく表現されていないこ

とが、資料の積み重ねに関係する問題として考えられる。また、「観念にふりまわされて、人間のふれあい、たたかいが弱い」、「描写が大げさで、表現に神経のくばりが弱い」、「観念的な感傷がだらだらとつづき、それが展開を見せない」、「人間が描けていない」³³と述べ、島尾は「性急的議論をまわし過ぎている」³⁴と述べた。議論と観念が先行し、描写の仕方がうまく出来ていないこと候補作品に共通した点として挙げられた。

結果的に、70、80年代の応募作品に「ふくらみ」とおもしろさの問題が選評で続いている。写実的に書かれた小説には、観念が物語と描写より先行し、文学としてのふくらみが足りないということは、選考委員たちが長年にわたって感じたことである。実際の応募作品と選考委員が期待する作品がずれており、選考委員がそのズレを「ふくらみが足りない」、「面白くない」という言葉で作者たちに返信した。

ただ、1980年琉球新報短編小説賞の第8回選考では大城立裕が「選考会議で、〈沖縄〉にかかわる話題が一度も出なかったことも珍しいが、これもやはり、選考にあたって無理なこだわりをすてていたという意味であることを、報告しておきたい」³⁵と選考過程に起きた変化に触れた。また、新沖縄文学賞の第8回（1982年）以降は、連続的に受賞作がない年はなくなった。さらに、2001年以来は毎年受賞作が出ている。各賞にも、作者と選考委員のねらいが近づきつつある感じがする。

設立から数年の間に、ふくらみが大きい問題と指摘されていた。70年代後半からはふくらみのある作品がますます出てきた。それは、作品を沖縄文学として読める同時に、それぞれの読者が想像力を働かせて読む自由を得たからだろう。

Ⅱ. 受賞作品から考える「文学としてのふくらみ」

1. 『骨』

『骨』は1973年に琉球新報短編小説賞に受賞した嶋津与志³⁶の小説だ。先に述べたように、『骨』は選ばれたほかの3作の描き方と異なり、小説から沖縄戦の記憶を読者に呼び起させ、戦争遺骨の問題、復帰後の沖縄振興にもたらず一連の問題が直接読み取れる。

小説の舞台は終始、那覇の建設現場である。地上20階のホテルの建設作業をしているなか、骨が見つかった。戦死者の遺骨と疑われ、建設業者の作業が止まった。骨の発掘をめぐり、元の地主カメ婆さん、市役所の係長、建設会社の現場主任、主人公の鎌吉が登場され、それぞれに個人の戦争体験と記憶を思い出した。建設現場で見つかった戦争の遺骨の描写は、実際に戦後沖縄にあった風景を想起

させる物語だ。

鎌吉が骨を通して防衛隊にひっぱられた父親の面影を見えてきた。最初は父親に関する記憶は薄かったが、次第に、現場で掘り出した骨の所有は不明のままにもかかわらず、「頭骨の上に父の面影を描いていた」、「目の前に父親が横たわっているような錯覚にとらわれている」ことになった。戦争経験のない世代まで届いた記憶、あるいは、思い出させる力が発掘現場に生まれた。また、戦争記憶のみならず、骨に肥えた大根を食べた今生きている人の話も出ている。地元の男性と市役所側、建設会社の人は作業をしながら笑い話のように戦争での経験（直接に沖縄戦が書かれていない）を語った。

ここは記憶の継承とは別に、「生きのびてきた」という、生存にかかわるものである。捕虜となった経験が思い浮かべながら、今に生きている感覚がより強くせめてきた。また、戦死者の骨は大根の肥やしとなり、人間が大根を食べて生きのびたという、連続的な発想がある。

大根の肥やしに加え、骨で養われたガジュマルの話もあった。現場では、ガジュマルを倒すかしないかという点について意見が分かれた。「ですから、かえってじゃまなんですよ、自然木だと。ここは椰子と蘇鉄がモチーフに使われるんです」と建設会社からの決定に、それまで口を閉じて骨を掘るばかりのカメお婆さんが強く反対した。

高層ビルの建設のために壊されるものを、大根とガジュマルという人間とともに生きてきた具体的な生物を借りて描写された。なお、戦争遺骨の問題、と骨の発掘現場でつながる個人の戦争記憶の描写は物語の軸となっている。

選考委員の大城立裕は『骨』についてこう述べた：

『骨』は考えた作品である。考えたとは、図式的に構成がしっかりしたということであるが、そこから欠陥もあるわけで、それは感覚的にふくらみが足りない、つまり小説を読んだという感動が現におちたということにもなる。主人公鎌吉の骨への感傷が、もっと腸にしみわたるものであってほしい。(中略) 復帰と資本攻勢とかいうことをシチュエーションにしながら、書いてあることは、沖縄人の骨に対する感傷と信仰である³⁷。

大城は復興の背景に本土から沖縄に入った資本の問題を復帰後の沖縄社会の現実を反映する点を入賞理由としてあげた。ただ、「感覚的にふくらみが足りない」という表現には、小説の文体に関心を寄せ、沖縄の写實的に描写に加え、言葉の鍛えと作風のおもしろさへの期待が含まれている。

実際に、『骨』を含め予選を通った5つの候補作品³⁸には、題材に共通する点

があげられた。大城は「予選を通過した5篇に共通していることは、土着への関心の深さである。(中略)土俗的、風土的なものの表現技術については、まだ弱さがあるにせよ、この動向は沖縄の文学として喜ばしいことであると思う」³⁹と述べている。

ここで大城は土着への関心良い変化として捉えた。彼にとってローカルな沖縄を描く物語が沖縄の文学として大事なことであり、地域的な描写を肯定的にみている。

だが、安岡章太郎は沖縄、特に復帰後の沖縄を題材にする作品の問題をこう指摘した：

こんどの候補作を読んで“復帰後”を感じたのは「失業」(田中康慶)のやうに米軍基地で働いてゐた労働者の問題を扱った作品もだが、それ以外の作品も全体として、米軍統治の後遺症のやうなものを直接間接、感じさせられるものが多かったからである。(中略)現在の沖縄には、書くべきこと、言ふべきことが、まったく多過ぎるやうだ。(中略)問題点はあまりにも明らかに1つのことに集中され、その結果、どの作品も千篇一律になりかねない⁴⁰。

琉球新報短編小説賞第1回の選考で、大城は「土着への関心」を「沖縄文学」として捉えた。沖縄の風俗習慣などを題材として小説に描いたことは、ある程度肯定的に評価されている。安岡は日本復帰から1年経った1973年当時、候補作品の題材が米軍占領下に置かれた27年間という沖縄の特殊な歴史に縛られていることを述べ、小説の題材が1つの問題に集中し、どの作品も「千篇一律になりかねない」と指摘した。その中、土着、米軍占領下の歴史を描く内容は本土と異なる「沖縄文学らしい」ものだと選考委員が考える。沖縄を描くことは、本土と区別する沖縄の独特な歴史を物語にする作業となり、あるいは、この特性を抱えている。ただ、その特性は岡本恵徳が述べた沖縄文学の悲劇⁴¹に近いだろう。

社会的・政治的に沖縄は本土側から歴然たる差別を受けていたので、その差別に対する反発から、ことさらに沖縄の伝統的なものに固執しようとする傾きをみせるものもあった。(中略)このように、沖縄に置かれた社会的・政治的状况によって文学が直接的に規制されているという事情、言葉を換えていえば、政治的・社会的状况の厳しさの故に、どうしても文学がそれから自由になりえていないというのは太平洋戦争後の現在の沖縄でも同様である。むろん、政治的・社会的状况と文学とが無縁であるとは考えられないにして

も、それらの状況からの影響をあまりにも直接的に受けすぎてきたことが、沖縄の明治以後の文学の悲劇でもあったし、現在の悲劇でもあるといつてよいと思われる。

1973年の『骨』をめぐる選考は、政治と社会の影響の下で文学を考えるという見方で行われた。作品内容と選考経過から沖縄文学の独特さと沖縄の地域性へのこだわりが強く感じられ、それを「沖縄的なもの」として文学で表現することとなった。だが、選考委員の安岡は多様性に、大城は土着に注目し、沖縄文学の題材に関してさまざまな観点が述べられた。そこで、1973年度第1回の琉球新報短編小説賞では、沖縄文学とは何かという問いがすでにあらわれた。

2. 『ロスからの愛の手紙』

『ロスからの愛の手紙』は1978年琉球新報短編小説賞第6回に満票で当選した作品である。登場人物は2人の沖縄人女性、金城末子と又吉登美子で、彼女らとの関係から間接的に書かれたアメリカ人男性ドナルド・ストローと東京から来た男性吉田の2人がいる。末子はアメリカ人男性と結婚してロサンゼルスに移住したが、言葉や生活に困り沖縄に帰った。だがその後、夫から何年も連絡が来ず、捨てられた危機感を持っている。そこに曖昧なのは、復帰前の沖縄や米軍基地など、大まかな沖縄の歴史がわかる読者が、これを沖縄人女性と米兵のラブストーリーではないかと推測できる。だが、アメリカ人男性の話は、一般的に想像される米軍基地と米兵の関係を背景に置かず、また、両者の直接な関係を書いてもいない。アメリカ人男性はアメリカに戻る前、沖縄の米軍基地で働いた米兵だった可能性が大きいかもしれないが、詳しく書かれていない。彼が現在就いているロサンゼルスでの仕事は、末子と2人の未来に直接影響するもの、あるいは、末子と登美子の関係を描くものとして紹介された。物語の展開に必要な内容のみが書かれ、物語に直接関係がない米兵や基地問題などが省略された。沖縄を描く物語から、物語をつくる中で出会った「沖縄」に変化している。

又吉登美子は東京から来た上司である吉田と不倫関係になる。吉田の愛人という立場に置かれ、不安定で、いつか別れるかもしれないと心配している。吉田の離婚を待っている登美子は、彼との関係を長く続けたい気持ちがある。そのため、2人の関係は平等ではなく、吉田は主導的な立場に立つ。登美子はこの歪んだ関係の中で感じた陰鬱さを自分は沖縄の女だからという理由に帰結させた。そのため、吉田に捨てられても、自分の失敗ではなく、沖縄の女性の失敗、沖縄の女性だから捨てられるのは当然だと考えるようになった。しかし、沖縄の女は捨てられるという登美子の考え方は中学の同級生だった末子と出会った時につぶれた。

沖縄出身の末子は、アメリカ人と結婚してロサンゼルスに行ったことがある。また、昔の末子を思い出すと、衝撃がより大きくなったようだ。登美子は民政府の高級官僚だった父がいる家庭で育ち、優等生で東京の一流女子大に進学した。彼女が末子に対して持つ優越感は2人が再会する時の心理描写で現れた。だが、上司の愛人となった登美子にとって、末子のほうが幸せな生活を送っているように見える。末子がロサンゼルスで結婚したという話は、登美子の心に刺さった。ただ、末子はアメリカにいる夫を待っている間に、登美子に捨てられる沖縄の女に言われて狂ったような様子が描かれた。表面にみれば、男性との付き合いで2人が取った態度の違いが描かれているが、実際に抱えている不安は一緒である。その不安が登美子の「捨てられた沖縄の女」という言葉を通して現れている。

登美子が末子への嫉妬が最後まで続き、劇的な展開が起こる。登美子は末子にアメリカに送る手紙の英訳を頼まれたが、その返事がくるとは思わなかった。だが末子に届いた返信には、末子を来年の夏に迎えに来ると書いてあり、末子がアメリカ人に捨てられていないことをわかった。前文で段階的に触れた、東京の上司との関係、学生時代の優越感はすべて末子への悪意に変わり、爆発した。

来年アメリカで別の人と結婚するという嘘のままで小説が終わった。このエンディングに至るまで決定的なのは「捨てられる沖縄の女」ではなく、登美子と末子の関係である。その関係の発生する場所を沖縄以外に設定してもかまわない。

以上「ロスからの愛の手紙」において、アメリカ人男性の元の職業が米兵とは明確に書かれておらず「沖縄的なもの」は省略されている。物語の内容は男女関係を中心とし、地域へのこだわりが薄いという特徴がある。だが、恋愛小説としても読めるが、捨てられた沖縄人女性、不幸な沖縄の女などの言葉が登美子の口を通して繰り返されていることにより、読者の注目が「沖縄」に集められたことは変わっていない。物語は沖縄から離れておらず、むしろ、沖縄人女性が主人公にされたからこそ、このように展開できる。

今回の受賞作から考えられる変化とは、沖縄の地域に基づく創作から、沖縄と外の関係から沖縄をみることになった点にある。「沖縄」という言葉において場所、地域の意味を強調することから、恋愛などの普遍的な話題を通して、沖縄人として感じた内面的なものに注目するようになった。ただ、沖縄を描き続けている点は変わっていない。

1973年度の受賞作『骨』と比較すると、『ロスからの愛の手紙』は少しでも「沖縄らしさ」から解放されつつあることがみられるが、題材の変化は1つの大きい特徴となった一方、沖縄描写の問題は、文学賞の応募から受賞まで、作者と選考委員にとって、変わることはない重要なテーマである。大城は「主人公の女2人の像がくっきりとしていて、沖縄の女のある悲しみをユーモアとペーソスに包ん

で描き出した]⁴²と受賞作を「沖縄の女」を描く小説として評価した。霜多正次は「どうせ沖縄の女はアメリカ兵からも本土人からも捨てられるのだ」⁴³と述べた。沖縄の物語をわかった上で読めば、米兵の姿が浮かび上がるかもしれない。先述のように、アメリカ人は元兵士だった可能性が高いが、小説では明確に書かれていないにもかかわらず、霜多は選評で「アメリカ兵」という言葉を出したのは、戦後米軍占領下の沖縄で起きた物語として読んでいるからだ。

物語の題材が沖縄の風俗習慣や軍事基地から離れる傾向は受賞作を含め、今回入選した6編にもみられると大城⁴⁴が述べ、受賞作はほかの候補作と比べて特に沖縄地域の特徴を持たない作品ではない。また、大城「沖縄の女」と霜多「アメリカ兵」の言葉からみれば、選考では小説が米兵と沖縄人女性の物語として読まれた可能性が高い。物語は沖縄でなければ展開できない物語である同時に、選考委員も沖縄文学として読んでいる。そのような視点から、沖縄文学としての作品を文学賞で評価する傾向が強い。

3. 『お墓の喫茶店』

1980年の琉球新報短編小説賞第8回の選考経過では「主題の変化がある」と明確に書かれた。

いぜん土俗、基地、沖縄戦への固執はあるけれど、代わって恋愛ものというか、男女間の問題を扱うものが増えた。SFも登場している。そのことは半面で、単に沖縄にこだわらなくなった—というにとどまらない。別の課題を生んでいる⁴⁵。

主題の変化とは沖縄の土俗と歴史から恋愛やSFといった地域的なものから普遍的にかつおもしろい話題への変化がみられる。内容は確かに沖縄と直接的な関係が薄くなったが、それを「沖縄にこだわらなくなった」のとは言えず、「別の課題を生んでいる」と述べられた。大城が「〈沖縄〉にこだわらなくなったことも一概によいともわるいともいえないだろうが、それなりに深める努力が大事である」⁴⁶と肯定的に述べた。選評では沖縄を題材にするかどうかは問題にしない傾向がみられる。

受賞作『お墓の喫茶店』には精神病院に勤めている主人公昭の視点を通して狂人たちが描かれた。狂人連盟という組織に所属している狂人たちの行動は、その描き方により現実世界から乖離している。つまり、単純に沖縄の精神病院を描く小説ではない。

喫茶店の場所は墓地の裏にある「狂人連盟の事務所」という異質な空間に設定

されている。そこにいる狂人たちは「病院長誘拐計画」を凶った。「病院長誘拐計画」が成功すると「精神病のレッテルを貼られた彼らは全員無罪放免となり精神病院送りとなり、入院歴のない自分だけが殺人犯にされてしまう」ことに気付いた昭は、逃げようとしたができなく、狂人の世界に強引に引っ張られたのだ。昭は狂人連盟に誘われ、元の自分にとって普通ではない考え方を納得するプロセスが書かれた。その後、昭はどんどん「誘拐計画」にひかれた。「深みにはまっていって自分を感じながら何故か心地よい風に吹かれて崖っ淵に立っているような気分がしていた」と冒険の気持ちになった。また、「この計画に加担し発覚した場合一体自分は何を失うであろうか。精神病院の相談員の仕事を失うことは確かだが、格別未練はない」という文から、主人公が日常生活に飽きたから、計画に積極的に参加することになったことがわかる。

「今、小さな牢獄を支配したひとりの男が死んでいくのだ」という最後の文からは、小さな牢獄は精神病院を象徴すること、死んでいく男は精神病院の相談員としての昭であることがわかる。主人公は「病院長誘拐計画」によって今までいた社会では死んでいたと考えられる。ここで再生するのは、狂人の世界にいる昭ではないか。

物語が主人公昭、狂人、精神病院の患者と殺された院長の四つの側面から展開している。狂人と院長は対立的な関係で、患者と昭の立場は曖昧である。だが、患者はすでに社会に屈服して精神病院という建物に閉じこめられているが、狂人連盟は反抗的である。精神病院は既に社会に存在しているが、「狂人連盟」は精神病院の外にある異質な空間である。主人公昭は狂人の世界に近づいていく。狂人側から見る精神病院の院長は「長期にわたって市民社会へ奉仕したその内実は、数千人の狂人を精神障害者と呼び収容拘禁し飼育殺しにしながら億の財を築いてきたことと一致する」反抗のシンボルである。

精神障害者と診断された人は精神病院におかされ、反抗すると狂人とみなされることが、どれぐらい反抗しても変えられない状況ことが描かれ、戦後沖縄の精神医療問題と結びつけられる物語としても読める。「治療にかかわる実践の問題を、記憶や証言とは異なる医療の問題として切り離すことは、症状とされる言葉とそうでない言葉の区分を、そのまま承認することになるということだ」⁴⁷。

しかし、作者玉木一平は戦後沖縄精神医療の問題を小説の表に出していない。それまでの選評で何回も指摘された調べた資料を小説に積み重ねることはない。終わりの文には狂人の勝利が見えるが、「昭は演じおえた自分の役割がすでに自分の現実に移ったことを覚った」と、主人公の立場の変化がある。「誘拐計画」は事実上の犯罪で、昭を含めて当事者全員は精神障害者となってしまう中、精神病院と狂人連盟の対立関係はずれておらず、実際は何も変わっていない。『お

『墓の喫茶店』は絶望な物語である。だが、絶望を精神医療現場の描写ではなく、主人公昭の行動を通して伝わった。

気持ちを伝える描写の力こそ、今回の選考経過に書かれた「別の課題」ではないか。沖縄の深刻な問題を背景にする小説であるが、それに執着感が薄く、読者の想像により読み方が変わる。特定の地域や問題を中心に据えて描写の仕方から、物語の流れから自然に沖縄が浮かび上がることになった。

4. 『嘉間良心中』

先述のように、受賞作が選ばれない理由は各作品により異なるが、選評では「ふくらみがたりない」との批判が続いていた。『嘉間良心中』はそれまで新しい題材が扱われた物語とは言えず、沖縄人女性と米軍にかかわる小説だ。選評では題材について沖縄の歴史を描く小説と位置づけられると同時に、ふくらみが出ている物語と以下のように評価された：

この通俗味をも取って含み持った娼婦の環境の描写には、沖縄の一時期の歴史の一齣が描き取られている。作者の目の位置が、女の心境や心の動きに添っている点も、この作品に哀歓を添えながら、思わぬふくらみを与えている原因となっているにちがいない⁴⁸。

「沖縄の一時期の歴史の一齣」を描く物語は、それまで文学賞の候補作品に多くある内容である。選評では、沖縄を描く小説のふくらみが疑われることもあったが、『嘉間良心中』はそうではない。大城は「テーマの上では新しい発見がなく、通俗読物すれすれの作品だが、不思議に最後まで迫力をもって読ませる」⁴⁹と述べた。

『嘉間良心中』は年取った女性キヨの目線からみる若い脱走兵のサミーとの物語だ。2人の関係が長く続けられないことに心配しているキヨの心理が小説の初めから最後まで続き、「心中」の結果にも繋がっている。若くない自分（キヨ）に対しサミーには快活さがあり、脱走生活の退屈さに耐えられないかもしれないとキヨが心配している。キヨが半分歩き回り半分仕事を探す気分で外に出た時の場面が描けられ、彼女の心理描写と行動を通して心配の気持ちが伝わってくる。貧乏な暮らしをしているキヨは娼婦の仕事をしてながら、脱走兵のサミーを養っている。キヨの年齢が強調され、サミーとの付き合いでは、娼婦の仕事は大きな問題となっている。

キヨの不安は表面的にはサミーが軍隊に戻ることであるようにみえるが、物語の描写からは、彼女のいままでの人生の不幸が伝わってくる。夫と別れ、子供と

の連絡も中断されているキヨにとって、サミーとの関係は世の中に唯一の温もりだろう。2人の恋愛まで至っていない関係を通して、キヨという年を取った身売りしている沖縄女性の姿が描かれている。生活の貧しさ、寂しさ、苦しさはすべてサミーに対する不安の裏に潜んでいる。

そのため、サミーの普通の外出によってもたらされるキヨの恐怖感はある程度誇張して描かれている。家に戻ってきたキヨはサミーがいないことにショックを受け、急いで外を探し回った。だが見つけれず、部屋に戻った時のキヨは衝撃を受けた。

（帰ってはいない。帰るものか——。そうだ、ヨットハーバーかもしれない——だが、この夜更けにヨットハーバーに行く気になるだろうか）

突然ドアが風にあおられたように開いてサミーが入って来た。キヨの痩せた肩がくんと落ちた。涙がこぼれそうになった。

「どこへいったの」

声がとんがり、震えていた。

キヨの劇的な行動がここに書かれている。その後、サミーが軍隊に戻ろうという話をした時に、キヨがどれほど衝撃を受けるかが想像できる。キヨの表情、行動、心理の描写から「心中」の結末を自然に導かれていく。そこにサミーの性格を直接描く文章は少ないが、サミーの行動に対する女性キヨの反応を様々な面で描くことによって物語が進められる。そこで、従来多く扱われた沖縄人女性と米軍を題材する物語は、読者に想像の余地を与える描写の空白が現れ、ふくらんでいる。また、新沖縄文学賞第10回に選ばれた4つの候補作の作者は、受賞歴史上初ですべては女性である。『嘉間良心中』は女性たちが描かれる立場から創作活動に転じる証拠でもいえるだろう。

おわりに

本稿では1970年代に沖縄で設立された琉球新報短編小説賞と新沖縄文学賞の受賞作品を中心に研究してきた。各賞の応募対象は沖縄県在住者、または沖縄県出身者に限っている。また、設立から数年の間、受賞作を選びにくく、さらに受賞作がなかった年が多くある。例年の選評においては、「文学のふくらみが足りない」、「面白くない」という評価が続いている⁵⁰。だが、ふくらみやおもしろさの基準が明確になっていないまま行われた選考過程から、沖縄を題材にすることは作者と選考委員に共通するキーワードとなった一方、沖縄文学の定義が定めら

れていないことが考えられる。

その際に、1970年代後半から80年代前半頃にかけて、受賞作品からは、主題の変化が明確的にみられる。選評ではふくらみが出た、おもしろいどのように評価され、作者が描く沖縄と選考委員が求める沖縄文学の様子が接近していくことがみられる。まずは沖縄戦の記憶と復帰後の沖縄振興にかかわる問題が直接読み取れる、1973年度琉球新報短編小説賞第1回の受賞作『骨』を考察した。また、『骨』と異なる手法と側面から沖縄を描く転向期の受賞作品から『ロスからの愛の手紙』、『お墓の喫茶店』と『嘉間良心中』を選評と合わせて分析した。

その結果、作品には「ふくらみ」が出たと選考委員に評価されたように、沖縄らしさから解放される傾向がみられる。沖縄を日本本土から離れた距離で独自性を文学で表現する、あるいは、本土との関係をはかりながら独特な文化を描くことは、文学賞の制度を通して形成されている。設立から数年の受賞作がなかった状況から、受賞作品が選ばれたことに変化してきた。作者と選考委員が想像する沖縄文学の様子が近づき合いながら、沖縄文学とは何かとの問いに共通する答えが出され続けているプロセスがみられる。ただ、こうした接近過程では沖縄文学を扱う課題と文学性をめぐる議論が生じている。文学賞制度の下で広げられた議論は、沖縄文学を多様化する一方、沖縄文学の定義をめぐる思考と実践の方法が文学賞の選考で浮かび上ってきた。したがって、沖縄に関する新しい問題点を提起し続けており、沖縄文学の意味はその都度に豊かになり、作品に描写された「沖縄」そのものも文学賞の選考によって変化していくプロセスもみられる。

その際に、作者は応募する際に「沖縄」に関心のある選考委員を想定し、創作活動を行うと同時に、選考委員は作者に「沖縄」の物語を期待する。沖縄文学における沖縄の政治と歴史にかかわる知識が創作活動により表面化され、作者と選考委員は選考を通して沖縄文学へ共有する部分が生まれた。このように、選考委員と作者の間に、お互いに響き合う沖縄文学への想像／期待が現れただろう。たとえば、新沖縄文学賞第8回の受賞作『母たち女たち』に対し、島尾は「奇妙に現代の沖縄の投影と見える所がおもしろかった」⁵¹と肯定した一方、大城は沖縄に生きている者の常識⁵²と否定的に述べた。文学賞の選考委員は沖縄と日本本土出身者がともにあるが、出身でコメントの方向が異なる。だが、このような沖縄文学に対する想像／期待は、沖縄文学が沖縄の歴史に恵まれた同時に、現実制限されたこともある。

こうした想像は沖縄文学に対するもののみならず、文学描写におけるジェンダー問題に結びつける可能性もある。本研究で考察した『ロスからの愛の手紙』と『嘉間良心中』は女性を対象にする作品である同時に、『嘉間良心中』が受賞した第10回の新沖縄文学賞ではじめて、候補作品の作者はすべて女性だったことから、

女性作家からの物語が大きなテーマとなったことが考えられる。新城郁夫によると、80年代から90年代にかけて沖縄文学は、女性作家たちの目覚ましい活躍に、状況論的テーマのみに収斂され得ない身体や性の領域から問いかけを自らの内に招き入れ、90年代に見出されるような実験的な文学への回路を開いた⁵³。この新しい傾向の中で崎山多美の作品に注目する。

崎山多美は1970年代ごろから小説を書き始めた。「街の日に」⁵⁴が新沖縄文学賞の佳作に選ばれた。選考委員の島尾敏雄の「文章に島の体臭とでも言うべき濃密な気配がただよっていました」という評価に、崎山は、ショックと屈辱感を受けながら、島を書く方法を模索し続けていることを、ASLE-Japan／文学・環境学会国際シンポジウム（沖縄、2003）で話した⁵⁵。新沖縄文学賞の佳作に選ばれた同時に、文学賞の制度で緩々と形成している沖縄文学に含まれない「街の日に」がある。崎山の小説は、彼女が持つ個人的な島の感覚から、外からの目で作られた「南島」への想像／期待を揺らせる試みであり、本土と沖縄の間にある、抑圧と抵抗、見ると見られるという関係を見直すなかで、文学を通してこうした関係から別の柔らかい空間を創造するものだと考えている。

文学賞の制度に含まれないエリアに、沖縄文学はどのように書かれ、読まれているのか。沖縄文学の書き手と読み手はどれぐらい創作と想像の自由が得られるだろうか。それを今後の課題にしたい。

注

- 1 沖縄文学の定義が池宮正治、大城貞俊などの研究者により提起されたが、定められたものではない。言い換えれば、「沖縄文学」だけで表現できない、時期区分、作品内容と作者の地域性などがあり、沖縄文学の説明が常に必要となっている。
- 2 1871年に明治政府による廃藩置県が実施され、1872年に琉球藩となり、1879年に沖縄県が設置された。このような琉球における行政的な変化の背後に、日清戦争など清国を中心とする朝貢貿易の崩壊がある。
- 3 1966年に、沖縄タイムス社により発行され、雑誌の第4号に発表された大城立裕の『カクテル・パーティー』は、芥川賞に入賞した沖縄初の作品である。
- 4 特に、70年代と80年代初ごろには、受賞作がない年が多くある。琉球新報短編小説賞の1974年度(第2回)と1975年度(第3回)、新沖縄文学賞の1975年度(第1回)と1977年度から1981年度(第3回から第7回)までは受賞作がない。
- 5 1967年、『カクテル・パーティー』で芥川賞を受賞した。
- 6 鹿野政直「異化・同化・自立——大城立裕の文学と思想」『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社(1987)321-322.
- 7 1973年度琉球新報短編小説賞第1回の受賞作、作者嶋津与志。
- 8 1978年度琉球新報短編小説賞第6回の受賞作、作者下川博。
- 9 1980年度琉球新報短編小説賞第8回の受賞作、作者玉木一兵。
- 10 1984年度新沖縄文学賞第10回の受賞作、作者吉田スエ子。
- 11 新沖縄文学賞の初回から現在までの募集要項に載せている。
- 12 以下、引用文での漢数字もアラビア数字に変えることにした。
- 13 佳作に選ばれたのは又吉栄喜の『海は蒼く』と横山史朗の『伝説』である。
- 14 『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)30(1975), 224.
- 15 島尾敏雄「読後の印象」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)30(1975), 225.
- 16 牧港篤三「不思議なふくらみ」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)30(1975), 227.
- 17 島尾敏雄「作品としての弱さ」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)37(1977), 210-211.
- 18 島尾敏雄「選り別けることの苦渋」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)54(1982), 132-133.
- 19 牧港篤三「伏線としてある情況」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)54(1982), 134-135.
- 20 大城立裕「凝りすぎと素朴すぎ」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)54(1982), 133-134.
- 21 『琉球新報』5 December1973.
- 22 安岡章太郎「重く大き過ぎる主題」『琉球新報』5 December1973.
- 23 大城立裕「土俗への関心が高い」『琉球新報』5 December1973.
- 24 『常臥の館』とほかの二編候補作『怨霊島』、『内部に居る人が奇形な病人に見える理由』である。
- 25 大城立裕「ドングリの背くらべ」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)30(1975), 226.
- 26 Ibid.
- 27 牧港篤三「不思議なふくらみ」, 227.
- 28 島尾敏雄「読後の印象」, 225.
- 29 島尾敏雄「三重言語生活の感情」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)34(1977), 148-149.
- 30 大城立裕「凝りすぎと素朴すぎ」, 133-134.
- 31 ここの三作は、島尾が候補作から選んだ仲村渠ハツ『母たち女たち』、江場秀志『奇妙な果実』と香村佳男『海鳴』を指す。
- 32 大城立裕「気宇壮大な『ガリナ川のほとり』」『新沖縄文学』(沖縄タイムス社)34(1977), 149-151.
- 33 大城立裕「厳密な方言意識を」『新沖縄文学』37(1977), 201-202.
- 34 島尾敏雄「にじみ出てく屈折感覚」『新沖縄文学』37(1977), 200-201.

- 35 大城立裕「多彩になった題材」『琉球新報』29 October1980.
- 36 嶋津与志、本名大城将保、1939年10月に沖縄県玉城村生まれ。
- 37 大城立裕「土俗への関心が高い」.
- 38 『琉球新報』5 December1973. 第1回琉球新報短編小説賞の予備選考を通過した作品は宮里尚安『トタン屋根の煙』、中里友豪『予感』、田中康慶『失業』、洋太郎『榕樹の如く』と嶋津与志『骨』である。その中、佳作に入選したのは『トタン屋根の煙』と『予感』である。
- 39 大城立裕「土俗への関心が高い」.
- 40 安岡章太郎「重く大き過ぎる主題」.
- 41 岡本恵徳『沖縄文学の地平』三一書房（1981）、12-27.
- 42 大城立裕「文章の水準も平均化」『琉球新報』29 October1978.
- 43 霜多正次「惜しい差別の描き方」『琉球新報』29 October1978.
- 44 大城立裕「文章の水準も平均化」.
- 45 「琉球新報短編小説賞の選評—選考経過」『琉球新報』29 October1980.
- 46 大城が「多彩になった題材」をテーマにした選評に沖縄にこだわらなくなったことは候補作に対する全体的な評価としてあげられた。
- 47 富山一郎「出会う場」『始まりの知 ファノンの臨床』法政大学（2018）133.
- 48 島尾敏雄「心に残った作品」『新沖縄文学』58（1983）、186-187.
- 49 大城立裕「対照的な作風の二作」『新沖縄文学』58（1983）、187-188.
- 50 『新沖縄文学』34-54（1977-1982）に掲載された選評を参考に.
- 51 島尾敏雄「選び別けることの苦渋」『新沖縄文学』54（1982）、132-133.
- 52 大城立裕「凝りすぎと素朴すぎ」『新沖縄文学』54（1982）、133-134.
- 53 新城郁夫「問いかけとしての沖縄文学」岡本恵徳、高橋敏夫、本浜秀彦編『沖縄文学選 日本文学のエッジから問い』勉誠出版（2015）300. ここにあげられた作品は仲村渠ハツ『母たち女たち』第八回新沖縄文学賞受賞（1982）、吉田スエ子『嘉間良心中』第十回新沖縄文学賞受賞（1984）、白石弥生『若夏の来訪者』第十二回新沖縄文学賞受賞（1986）、田場美津子『仮眠室』第四回海燕新入文学賞受賞（1985）である。
- 54 崎山多美「街の日に」『新沖縄文学』43（1973）.
- 55 山里勝己、高田賢一、野田研一、高橋勤、スコット・スロヴィック編『自然と文学のダイアローグ—都市・田園・野生』彩流社（2004）、147-157.

参考文献

- 池宮正治『琉球文学総論』笠間書院, 2015年.
- 岡本恵徳『沖縄文学の地平』三一書房, 1981年.
- 岡本恵徳『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社, 1981年.
- 沖縄文学全集編集委員会『沖縄文学全集第8巻小説Ⅲ』国書刊行会, 1990年.
- 沖縄文学全集編集委員会『沖縄文学全集第9巻小説Ⅳ』国書刊行会, 1999年.
- 岡本恵徳、高橋敏夫、本浜秀彦編『沖縄文学選 日本文学のエッジから問い』勉誠出版, 2015年.
- 鹿野政直『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社, 1987年.
- 『新沖縄文学』30号(沖縄タイムス社)1975年12月.
- 『新沖縄文学』34号(沖縄タイムス社)1977年1月.
- 『新沖縄文学』37号(沖縄タイムス社)1977年12月.
- 『新沖縄文学』54号(沖縄タイムス社)1982年12月.
- 『新沖縄文学』58号(沖縄タイムス社)1983年12月.
- 『新沖縄文学』62号(沖縄タイムス社)1984年12月.
- 瀬戸口律子『『琉球官話』の世界——三〇〇年前の会話テキストが描く民衆の喜怒哀楽』榕樹書林, 2011年.
- 高阪薫・西尾宣明編『南島へ南島から一島尾敏雄研究一』和泉書院, 2005年.
- 高良勉『魂振り—琉球文化・芸術論』未来社, 2011年.
- 富山一郎『始まりの知 ファノンの臨床』法政大学, 2018年.
- 山里勝己『琉大物語 1947~1972』琉球新報社, 2010年.
- 『琉球新報』(琉球新報社)1973年12月5日.
- 『琉球新報』(琉球新報社)1976年10月21日.
- 『琉球新報』(琉球新報社)1977年10月23日.
- 『琉球新報』(琉球新報社)1978年10月29日.
- 『琉球新報』(琉球新報社)1980年10月29日.

Abstract

How literature defines *Okinawa*: Relationships between Literature Prizes and Okinawa

Mengxiao ZHANG

In 1973, *Ryukyu Shimpo* started Short Story Prize. Two years later, *Okinawa Times*, another famous newspaper in Okinawa, established New Okinawa Literature Prize. After the Battle of Okinawa in WW II, Okinawa was under the control of The United States Military Government of the Ryukyu Islands (USCAR) for 27 years. After The Okinawa Reversion Agreement, the administration of Okinawa was officially transferred to Japan in 1972. Soon, two newspapers with the power of advertising started Literature Prizes. Some Okinawan literature research focus on the relationship between Okinawan literature and politics. Magazine *Ryudai Bungaku* was firstly published in 1953 during the postwar period of the US military government. In that regard, Keitoku Okamoto considered *Ryudai Bungaku* to be a reaction to the US military anti-communist policy in the early 1950s, and Masanao Kano described *Ryudai Bungaku* and the actions of Ryudai students to the literature of rebellion against the US military government. After returning to Japan in 1972, Okinawan literature is considered to be in a different political environment. Therefore, Keitoku Okamoto divided the literature from the postwar period to *literature under occupation*, and *literature after the return of the administration*.

However, this paper focuses on Literature Prizes which gathered Okinawan authors and readers. Newspaper *Ryukyu Shimpo* and magazine *New Okinawa Literature* became places to announce the awarded novels. Two Literature Prizes are both kind of regional, and they only allow Okinawans or the people living in Okinawa to apply. During the review of selectors comments, it is proved that at the beginning of several years, they had difficulty to choose a novel to be awarded. The selection committee members have been discussing about what Okinawan Literature means and how it can become. It seems that the

work of defining Okinawa literature is caused by the selection system. On the other hand, the definition of Okinawa Literature changes during the selection. Therefore, I will particularly pay attention to four awarded works from the 70's to the early 80's. 『骨』 is a novel that evokes the memory of the Battle of Okinawa, and the series of problems which can be read directly from the novel. I choose 『ロスからの愛の手紙』, 『お墓の喫茶店』, 『嘉間良心中』 that describe Okinawa in a different way to compare with 『骨』. The awarded works are selected under the Literature Prize and regarded as Okinawan literature. The definition of Okinawan literature has been decided during the selection, while there are more and more novels became different. Each reader can use their imagination to read freely. This paper attempts to clarify the formation and change of the definition of Okinawan literature under Literature Prizes.